

**主 題：旧約に見る救い主の予型****聖書箇所：ルツ記 1章1-5節、4章13-17節**

おはようございます。旧約聖書のルツ記をお開きください。

今まで旧約聖書の中から「神様の救いのご計画」というお話をさせていただいていましたが、きょうはよく似たタイトルですが「旧約に見る救い主の予型」ということでルツ記からお話をさせていただきたいと思います。

きょうは母の日ということで特別にこの箇所を選ばせていただきました。聖書の中に母の日が出てくるわけではないのですが、私たちはお母さんのことを覚えて、きょうのこの日を過ごすという流れが日本の中にあります。私の母親は今から50年前に脳卒中で倒れてそのまま床に臥せっていて、そういう状態が何年か続いた後、私がお社勤めをしていた時に亡くなりました。私がある時教会に来ると、岩佐先生が「和智さん、お母さん救われました」と言われたのです。岩佐先生はそれまで私の家を訪問されたことはなかったと思うのですが、いつかそのようにして母親を訪ねて伝道してくださった。そして、その時1回で神様は働いてくださって、母を救ってくださったということを覚えています。先日、合同記念会が服部緑地でありましたが、1年に1回しか思い出さないような親不孝な私ですが、数えてみれば50回近く墓地へ行って母親のことを思い出す機会に恵まれていることも感謝ですし、やがて天で再会することができるということもまた本当に感謝しています。

母は私が5人兄弟の長男で一番年上なので、いつも「兄ちゃん、兄ちゃん」と言ってよくしてくれました。例えばご飯の盛りが多いとか、おかずが少し多いとかで優越感を感じていましたが、時々母親に叱られることがありました。母は非常に気が強いというかすごい剣幕で怒るものですから、とても怖くて、私はこのお母さん、本当のお母さんと違う、継母に違いないと思っていました。きっと私のことを尋ねてくる本当のお母さんがいるというようなことを考えながら時を過ごしていました。本当の母なんですけどね。(笑)親子の関係というものはいつまでたっても懐かしい思い出として残るものです。子どもとして母親に対してどれだけ親孝行したかという、余りできなかったかなと思っています。私は亡くなった翌年に結婚しましたから、孫の顔も見えていないということです。子を持って知る親の恩と言いますけれども、子どもができて初めて母の大変さもわかりましたし、孫ができたら、母に孫の顔を見せてやりたかったなと思う時もあります。でも亡くなってしまうと、そういうこともできない。生きておられる今がその機会だということを皆さんともども考えながら、このルツ記にはすばらしい家族が記されていますので、このルツ記を通して学びたいと思います。

**★ルツ記**

ルツ記の著者は誰かわからないのですが、サムエルが書いたのではないかとされています。大体年代にしてBC1200年から1050年ごろと言われています。その理由は1:1に「さばきつかさが治めていたころ」とありますので、大体この年代の出来事ではないかということです。

**1. 主題**

登場人物がいろいろ現れて来ますが、特に救い主の家系、ダビデの系図が明らかにされています。たった4章しかないのですが、これを読むとどのようにしてダビデが生まれて来るのかということがよくわかります。またイスラエル人だけではなく、異邦人も用いられるということが明らかにされます。

**2. 登場人物**

エリメレク（私の神は王である） 妻ナオミ（私たちの喜び・快い） 長男マフロン（病める者）  
次男キルヨン（消えうせる者） 長男の嫁ルツ（友情・親切） 次男の嫁オルパ（髪の豊かな女性）  
ボアズ（彼のうちに力がある）：母はラハブ（マタイ1:5）後にルツと結婚

子どもはオベデ（仕える者） 孫はエッサイ ひ孫はダビデ（4:21-22、マタイ1:5-6）

残念ながら、ダビデという名前の意味はいまだにどういう意味かわからないということらしいですが、ほかのひとりひとりの名前は、ルツ記を読むとなるほどなと思うほどにぴったりな名前だということがわかります。

**3. 概要**

- ① ルツ、マフロンの母ナオミとモアブへ 1:1-18
- ② ルツ、ナオミの世話をする 1:19-2:23
- ③ ルツ、ボアズと結婚する 3:1-18
- ④ ルツ、ひとりの男の子オベデを産む 4:1-22

概要として、こういうストーリーです。ちなみに幾つかの地名が出て来ます。特にモアブというのは死海の下の方にあります。大体どんなところでこういうことが起きたのだなということを知っていたければと思います。

## A. キリストを象徴する人物

### 1. ナオミ（私たちの喜び） 1：18－21

1：1「この地にききんがあった。」とあります、ベツレヘムの付近にききんがあり、「それで、ユダのベツレヘムの人々が妻とふたりの息子を連れてモアブの野へ行き、そこに滞在することにした。」とあります。ユダヤに住んでいたのですが、あるときききんが原因でこの一家は息子ふたりを連れてモアブという地へ行った。モアブというところはエリコからヨルダン川を渡って、死海の右端、東の方をずっと下ってきたところ。大体100キロぐらいのところと言われていきますから、旅すれば三日間くらいかかる、そういう地理的な関係にあります。夫の名前がエリメレク、妻の名前がナオミ、ふたりの息子の名前はマフロンとキリオン、こういう四人でした。彼らはエフラテ人と書いてあります。ミカ5：2に「ベツレヘム・エフラテよ。」というふうなことばが出て来ますが、イスラエルと同じ意味を持っています。

「モアブの野へ行き、そこにとどまって」いた、そこに移り住んだのです。彼らはイスラエルには戻らないと一切の土地、財産を売って、着の身着のままモアブへやって来たということが聖書に記されています。そして、3節「ナオミの夫エリメレクは死に、彼女とふたりの息子があとに残された。」と聖書は非常に簡単に記しています。モアブに着いた時、夫が亡くなって息子ふたりになってしまった。そこでナオミはふたりの息子に嫁をもらおうと考え「モアブの女を妻に迎えた。」と。一般的にはイスラエル人はイスラエル人の中から妻をめとるのですが、モアブに来ましたから、モアブの中から嫁をとということだったのでしょう。長男はマフロン——病める者、次男がキリオン——消えうせる者と、考えてみたら変な名前です。長男の嫁がルツ、次男の嫁がオルパ、このふたりを迎え入れたとあります。約10年間そこに住みましたが、ふたりの息子も「また死んだ」と、聖書は非常に簡略に書いています。ふたりの息子は長男が病める者で次男が消えうせる者と、私たちは名前のせいじゃないかと思うほどの出来事がここに記されています。

そして「ナオミはふたりの子どもと夫に先立たれ」、残ったのが息子の嫁ふたりとナオミと3人だった。彼女は10年たったある時に、こういう状況になったから生まれたところへ帰ろうと考えます。なぜなら、ききんのためにこのモアブの地へ来たのですが、もうそのききんは解消されて今は豊作だといううわさが流れて来たので自分の生まれたところへ帰って行こうとしたと6節に記されています。7節「そこで、彼女はふたりの嫁といっしょに、今まで住んでいた所を出て、ユダの地へ戻るため帰途についた。」、その途中、ナオミは子どもたちのモアブ人のふたりの嫁をこのままユダヤへ連れて帰っていいものだろうか考えるのです。彼女たちは不幸になるのではないかと考えて、今まで育ってきたところへ帰れと言います。でもふたりの嫁は帰りたくないと言って涙ながらにナオミに訴えたと言われていますが、14節を見ると「彼女たちはまた声をあげて泣き、オルパはしゅうとめに別れの口づけをした」とあります。次男の嫁の方ですね。

### ◎ モアブ人

モアブ人というのは、創世記19：36－37にロトの娘が父によって得た子どもの子孫だと記されています。「こうして、ロトのふたりの娘は、父によってみごもった。姉は男の子を産んで、その子をモアブと名づけた。彼は今日のモアブ人の先祖である。」、これがモアブ人の始まりです。ロトの娘たちは結婚することができなかったので、このまま子どもがいなくなるということでお父さんと関係を持ったということが聖書に記されています。姉娘の子どもがモアブ人の先祖、妹の方がアモン人の先祖ということになります。

イスラエルとモアブ人の関係は申命記2：9に「主は私に仰せられた。『モアブに敵対してはならない。彼らに戦いをしかけてはならない。あなたには、その土地を所有地としては与えない。わたしはロトの子孫にアルを所有地として与えたから』と記されています。「敵対してはならない」、「戦いをしかけてはならない」、これがモアブ人とイスラエルの関係です。でも、同じ申命記23：3には「アモン人とモアブ人は主の集會に加わってはならない。その十代目の子孫さえ、決して、主の集會に、はいることはできない。」とあります。戦いをしてはいけなけれども、彼らを集會に参加させることはだめだと。理由として考えられるのは、申命記23：4にモーセがイスラエルの民をエジプトから連れ出して約束の地へ入ろうとした時に、モアブ人はバラムという人を雇ってイスラエルをのろわせようとしたと記されているからです。もう一つの理由はアモン人もモアブ人も偶像崇拜をしていたから、まことの神様を礼拝しない民だということです。アブラハムの甥のロトの子孫だから仲良くするけれども、神様を礼拝する集會には参加させるなというのがモアブ人の立ち位置だったのです。だからナオミはもう帰った方がいいと考えたのです。

そのことばを聞いて次男の嫁の方は帰って行きましたが、長男の嫁のルツは帰らないと言います。あなたの義妹は帰ったから、あなたも帰りなさいと1：15でさらにナオミは言うのですが、ルツは「あなたを捨て、あなたから別れて帰るように、私にしむけないでください。あなたの行かれる所へ私も行き、あなたの住まれる所に私も住みます。あなたの民は私の民、あなたの神は私の神です。」と告白するのです。お母さん、あなたが信じておられる神様は私の神様です。私もこの神様に従うのだとナオミに言ったのです。17節「あなたの死なれる所で私は死に、そこに葬られたいのです。もし死によっても私があなたから離れるようなことがあったら、主が幾重にも私を罰してくださるように。」と。ここでルツは“エロヒム”——「主」ということばを用いています。偶像崇拜の国の生まれでしたが、ルツはナオミを見て、夫を見て、お父さんを見て、この神様こそまことの神に違いないと確信したと思われまゝ。こうして「ナオミは、ルツが自分といっしょに行こうと堅く決心しているのを見ると、もうそれ以上は何も言わなかった」とあります。

母の日だからというわけではないのですが、新約聖書2テモテ1：5にこのようなことばがあります。「私はあなたの純粋な信仰を思い起こしています。そのような信仰は、最初あなたの祖母ロイスと、あなたの母ユニケのうちに宿ったものですが、それがあなたのうちにも宿っていることを、私は確信しています。」、パウロがテモテに書き送った手紙の中にこう記しています。テモテに対して「純粋な信仰」がある、その信仰のもととはというと、おばあさんとお母さんに宿っているものだと言うのです。同じ信仰があると。ルツもナオミを見て、この義理のお母さん、ナオミが信じている神様をこれこそ私の神だと告白したのです。

ちなみに子どもさんに対して箴言10：1に「知恵のある子は父を喜ばせ、愚かな子は母の悲しみ」と書いてあります。また同じ箴言15：20にも「知恵のある子は父を喜ばせ、愚かな者はその母をさげすむ。」、悲しむだけではなくて馬鹿にしている。そういったことがあると。子どもたちの立場として、両親に対してどういう態度を取ればいいのか、先ほど継母と違うかと思った私の気持ちがこういうところを見ると本当に愚かであったなと反省させられます。またお母さんだけでなく、年をとったご婦人に対しても1テモテ5：2にこう記されています。「年をとった婦人たちには母親に対するように、若い女たちには真に混じりけのない心で姉妹に対するように勧めなさい。」とあります。聖書はこのように私たちに對して格言を用いて教えてくれています。

このようにしてルツは本当にこのお母さんに死ぬまでついていくと言ったのです。ナオミはルツを連れてベツレヘムに着きます。19節を見ると「ふたりは旅をして、ベツレヘムに着いた。彼女たちがベツレヘムに着くと、町中がふたりのことで騒ぎ出し、女たちは、『まあ。ナオミではありませんか。』と言った。」とあります。10年前にこの町を捨てて出て行ったエリメレクとナオミとその息子たち。10年たって帰って来た時にはナオミと長男の嫁とふたりになっていた。その変わったことにびっくりしたと思えますが、でも懐かしい、お帰り、よかったねと声をかけてくれたようです。そのような歓待を受けたにもかかわらずナオミは彼女たちにもうナオミと呼んでくれるなと言います。ナオミというのは喜びという意味でした。私はもうナオミと呼ばれたくない、「マラと呼んでください。」と。「マラ」ということばの意味は「苦しみ」です。もう苦しみの人と呼んでと言うのです。なぜなら「全能者（神様）が私をひどい苦しみに会わせたのですから。」と。「私は満ち足りて出て行きました」、本当に大きな希望を持って、これから豊作のあるモアブへと夫とふたりの息子とともに勇んで出て行ったけれども、「主は私を素手で帰されました。」、財産も何もない。一緒に帰って来たのは長男の嫁のルツだけです。だから「なぜ私をナオミと呼ぶのですか。主は私を卑しくし、全能者が私をつらいめに会わせられましたのに。」と言ったのです。町の人にしたら、勝手に出て行ってそんなん知らぬという状態ですよ。

### 1) 私たちの喜び：ナオミ

イスラエルの民の中では家系を継いでいくためには男の子がいなければだめだったので、特に男系が大事ですから、ふたりの男の子がいたことで、ナオミは最初本当に家庭的にも恵まれていて、確かに喜んだ状態でした。しかし、「喜び」ということばの意味を見る時に、実際に私たち新約の時代にとって、私たちの喜びの源はイエス・キリストにあるということを教えています。ヨハネ15：11には「わたしがこれらのことをあなたがたに話したのは、わたし（イエス・キリスト）の喜びがあなたがたのうちにある、あなたがたの喜びが満たされるためです。」とあります。イエス様の喜びがあなたがたに「満たされるため」なのだと。

### 2) 苦しみ：マラ 1：21

ところが、神様がナオミを苦しみにあわせ、卑しくされ、辛い目にあわせられたとナオミは告白し、「マラと呼んで」と言います。イエス様も苦しみにあわれた。イザヤ書53：3-4には「彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。」と記されています。そして「彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと」私たちは思ったと言うのです。この「彼」というのはイエス・キリスト

の預言であることはご存じだと思います。旧約聖書だけではなく新約聖書でもピリピ2：6－8には「キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、」、どうしても私は神なのだから神のままにいたいということに固執されなかったということです。神様なのに「ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。」とあります。ナオミの苦しみはイエス様の苦しみに比べればどれだけのものかということがあります。「卑しく」されるというのは、謙遜にするという意味があります。イエス様もこのピリピ書にあるように、「ご自分を無に」された、「自分を卑しく」された。神であるのに人の形をとってこの世に来られたというふうにして謙遜な姿を私たちに教えているのです。「つらいめに」というのはいろいろな悩みや災いという意味ですが、あわせられた。イエス様も本当に悩みや苦しみにあわれたということを見ることができます。そのようにしてイエス・キリストのことを私たちに思い起こさせるのです。

### 3) 故郷に帰る(モアブからベツレヘムへ) 1：9、19

ナオミはモアブからベツレヘム、故郷に戻りました。人々は10年ぶりに帰って来たナオミを歓迎するのですが、イエス・キリストもまたよみがえられた後に天に帰って行かれたことを見ることができます。使徒1：9に「こう言ってから、イエスは彼らが見ている間に上げられ、雲に包まれて、見えなくなりました。」、神であられたのに、そのことに固執されないで人の形をとってこの地上に来られた。そして多くの苦しみにあわれたその後で、十字架に架けられて死なれたけれども、三日目によみがえられて天に上げられた。ナオミたちが故郷に戻って行くように、イエス様もまた天に戻って行かれたということを見ることができます。

### 2. ボアズ(彼のうちには力がある)

さて、ナオミとルツがベツレヘムに戻ってきたのはちょうど「大麦の刈り入れの始まったころ」だということが1：22に記されています。2：1に「ナオミには、夫の親戚で、エリメレクの一族に属するひとりの有力者がいた。その人の名はボアズであった。」とあります。そしてルツがナオミに言います。「どうぞ、畑に行かせてください。私に親切にしてくださる方のあとについて落ち穂を拾い集めたい」と。恐らく着の身着のままに帰って来たのでしょう。食べ物もない。私たちのために落ち穂を集めて食料にしたいとナオミに言います。「娘よ。行っておいで。」、母親はそう言いました。そこで「ルツは出かけて行って、刈る人たちのあとについて、畑で落ち穂を拾い集めた」とあります。

#### ◎ 落ち穂拾い

落ち穂を拾うというのがどういうことかがレビ記19：9－10に記されています。「あなたがたの土地の収穫を刈り入れるときは、畑の隅々まで刈ってはならない。あなたの収穫の落ち穂を集めてはならない。またあなたのぶどう畑の実を取り尽くしてはならない。あなたのぶどう畑の落ちた実を集めてはならない。」。なぜか——。「貧しい者と在留異国人のために、それらを残しておかなければならない。わたしはあなたがたの神、主である。」という神様の命令がこのようになされていました。「貧しい者」と、同じイスラエル民族だけではなく「在留異国人」のためにと。だからモアブ人のルツも含まれるのです。そういう人たちのために落ち穂を残しておいて、それを拾い集めさせなさいと言うのです。

そのことをルツも聞き知っていたのだと思いますが、彼女は落ち穂を拾い集めるという作業をしていました。2：3「それは、はからずもエリメレクの一族に属するボアズの畑のうちであった。」とあります。「はからずも」なので、ルツは知らないで畑へ行って落ち穂を拾い集めていたら、それが「エリメレクの一族に属するボアズ」の畑のうちであったと。そうしてボアズがちょうどベツレヘムからやって来て、刈る者たちに言います。「『主があなたがたとともにおられますように。』彼らは、『主があなたを祝福されますように。』と答えた。」と。ところでボアズがふと目を上げると、ひとりの女性が目に入ったのです。5節「これはだれの娘か。」と聞くと、世話をしていた若者があなたの親戚の「ナオミといっしょにモアブの野から帰って来たモアブの娘です。」と答えて言います。あれは誰かと聞かれた時にイスラエル人と違う、しかもモアブ人ですと。でもこの娘さんは7節「朝から今まで家で休みもせず、ずっと立ち働いています。」、もう休みなしに働いていて、本当に働き者だと。しかも落ち穂を拾う前に彼女が言ったことは、「どうぞ、刈る人たちのあとについて、東の間で、落ち穂を拾い集めさせてください。」、先頭に立って人をかき分けて我勝ちに取るというのではなくて、一番後ろでいいから集めさせてほしいと。本当に謙虚な、謙遜な、奥ゆかしい娘さんです。モアブ人だと言っておきながら、でも素敵な方ですと言ったのです。ボアズはルツに言います。「娘さん。よく聞きなさい。ほかの畑に落ち穂を拾いに行ったり、ここから出て行ったりしてはいけ」ない、世話をする若者に邪魔をしないようによく言うておきますから私の畑で落ち穂を集めなさい。もし「のどが渇いたら、」自由に水を飲んでください。本当にルツのために便宜を計ってくれた。このボアズの姿を私たちは見ることができます。

当然のことながらルツは本当に感謝します。10節「顔を伏せ、地面にひれ伏して彼に言った。『私が外国人であることを知りながら、どうして親切にしてくださるのですか。』」と書いてあります。自分が外国人だということをよくわきまえていたということがわかります。11節「あなたの夫がなくなってから、あなたがしゅうとめにしたこと、それにあなたの父母や生まれた国を離れて、これまで知らなかった民のところに来たことについて、私はすっかり話を聞いています。」、本当によく尽くしている、夫のお母さんに対してのその振る舞いはすばらしい、そういうことを聞いていると言うのです。だから12節「主があなたのしたことに報いてくださるように。」と。本当のお母さんだけではなくて義理のお母さんにも仕えよということを書いたのです。「イスラエルの神、主から、豊かな報いがあるように。」と。ご主人さま、ありがとうございます。本当にあなたの好意にあずかりたい、あなたのはしためのひとりでもないのにこのようにして、私によいことをしてくださった、感謝ですと彼女は言うのです。そして、食事の時になると「ここに来て、このパンを食べ、あなたのパン切れを酢に浸しなさい。」と言います。なぜなら「彼女が刈る者たちのそばにすわったので」と書いてあります。だからそばへ来て一緒に食事をしようと。彼女は14節「十分食べて、余りを残しておいた。」とあります。理由はお母さんのためですよ。そして集めた落ち穂を持って帰ろうとした時に、本当に自由な集め方をさせると若者に言います。「あの女に恥ずかしい思いをさせないで、わざと束から穂を抜き落としておきなさいと命じました。「あの女をしかってはいけない。」、しかるところはどこにもないのですが、このように言ったというのです。こうして彼女は朝早くから夕方まで落ち穂を拾い集めた。そして集めてみると「一エパほどあった」、大体23リットルと言われていますが、それを持って帰ってナオミに見せたのです。

18節「また、先に十分食べてから残しておいたのを取り出して、彼女に与えた。」とあります。自分だけではなくて残しておいたものをお母さんのためにちゃんと持って帰って来たのです。一体どこであなたは落ち穂を集めたの？今までナオミの経験したところではそんなに好意的な畑はなかったはずだけど。ナオミの質問に「ボアズという名の人の所で働いた」とルツが答えると、「ああ、ボアズという方は私の親戚だ」とナオミは言います。20節後半を見ると「その方は私たちの近親者で、しかも買い戻しの権利のある私たちの親類のひとりです。」と。

#### 1) 土地を買い戻す

「買い戻しの権利」というのはレビ25：24-25に「あなたがたの所有するどの土地にも、その土地の買い戻しの権利を認めなければならない。もし、あなたの兄弟が貧しくなり、その所有地を売ったなら、買い戻しの権利のある親類が来て、兄弟の売ったものを買い戻さなければならない。」と書いてあります。貧しくなって土地を売ったら買い戻してその兄弟に返してあげなければいけないというルールがあったのです。その権利を持った親戚がボアズであったということです。

ルツが偶然ボアズのところへ行っただけなのか？聖書を見る時に偶然というのはないので、すべてが神様のご計画のうちにあるということです。買い戻しの権利のあるボアズさんは、刈り入れの時期にずっと私の畑で働きなさいと言われましたとお母さんに言うと、あの方のところの若い女たちと出かけるのは、いじめられなくてすむから結構なことだと。そこでルツはずっとボアズのところで働いたというのが2章の後半に記されています。

ある時しゅうとめのナオミがルツに言います。3：1「娘よ。あなたがしあわせになるために、身の落ち着く所を私が捜してあげなければならないのではないのでしょうか。」、モアブに帰らないで私と一緒にこのベツレヘムに来たモアブ人の嫁ですが、このままではエリメレク家の子孫は絶えてしまう。男性がだれもいない。でも私は年をとったから仕方がないけれども、この若いルツのために何とかしなければいけないのではないかと。あのボアズさんは私たちの親戚で、今麦をふるい分けようとしているからこういうふうにしなさいとルツに指示をします。3節「あなたはからだを洗って、油を塗り、晴れ着まとい、打ち場の下って行きなさい。しかし、あの方の食事が終わるまで、気づかれないようにしなさい。」、落ち穂を拾うのにそんな格好をして行くわけではないので特別なことだとわかります。そして、ボアズが食事を終わって寝る時、どこに寝るかを見届けて、そしてそこに入って行ってその足元に寝なさいと言うのです。そうしたら、ボアズがどうしたらいいかをあなたに教えてくれるでしょう。そうしてルツは言われたとおりのことをします。食事が終わってボアズは気持ちよくなって、寝床へ行き眠りました。それを見届けたルツは、ボアズの足元に寝ました。ボアズは夜中に突然目を覚まし、驚きます。3：8「夜中になって、その人はびっくりして起き直った。なんと、ひとりの女が、自分の足のところに寝ている」というわけです。あなたはだれですか？「あなたのはしためルツです。あなたのおおい（着ている服のすそ）を広げて、このはしためをおおってください。」、その理由は、「あなたは買い戻しの権利のある親類ですから。」と。「買い戻しの権利」があるとともに買い戻しをする義務もあるということです。近い親戚の権利を回復してあげる必要があると。

◎ 買い戻し：キリストを象徴する出来事（2：20、3：9、12、4：1、3、6、8）

この「買い戻しの権利」とは何かというと、ヘブル語の“ガール”ということばが使われていますが、これが「贖う」という意味です。家族や近親者が奴隷になった時に買い戻す——代価を払って奴隷の立場から自由にしてあげるといことです。もう一つは、このことばから派生した“ゴーエール”ということばですが、これは「親戚」という意味で用いられています。神と人との関係が最も近い親族として表されている特別なことばです。特にここに「買い戻しの権利のある親類」と書いてあります。あなたは“ゴーエール”だから買い戻しの権限のある人だと書いてあります。ヨブ19：25を見るとヨブが神様のことを「私を贖う方は生きておられ」と言っています。だから“ゴーエール”——私を贖ってくださる、代価を払って私を回復してくださる方だ、それがボアズさん、あなたですと。

しかし、ボアズは言います。娘さん、あなたの言われることは本当にそうです。あなたの言うことはみなしてあげたいと思う。でも私よりももっと買い戻しの権利のある、ボアズよりエリメレクに近い親類がある。一番近い親戚が買い戻すというのが当時の掟でした。だからその方を無視して私があるあなたをそのようにすることはできない。ルツはからだを洗って晴れ着を着て行ったのですから、私と結婚してほしいという意思表示なのはわかりますね。でも先に権利のある人の意向を確認しなければならないから、私には今はそれはできない。もしその人がいいよと言ったら、私はあなたを買い戻します。でもその人が私を買い戻すと言ったら私にはできませんと言ったのです。彼女は朝までボアズの足元で寝ましたが、朝早く起き上がって、誰にもわからないように帰って行きました。ボアズはその帰り際にまた外套を持ってきて、「大麦六杯を量って、それを彼女に負わせ」て彼は町へ帰って行ったと記されています。

ルツがナオミのところに帰って来ました。ナオミはどうだった？と送り出したルツを期待を込めて迎えたのです。ルツは、ボアズさんは本当にしっかりした人で、私より先に権利のある人の意向を伺わないとだめだというボアズの返事を伝えました。でもこれだけ大麦をいただきましたと。ナオミはこのボアズを見て、すばらしい人格者であると思ったに違いありません。3：18に彼女は「娘よ。このことがどうおさまるかかわかるまで待っていなさい。あの方は、きょう、そのことを決めてしまわなければ、落ち着かないでしょう」と言います。

## 2) ルツとの結婚：目的のある結婚——この家系から救い主がお生まれになる——

そして4：1「一方、ボアズは門のところへ上って行って、そこにすわった。」、誰もが通るところです。その目的は、最も近い親類が通るのを待って、ルツが来たそのことについて私を買い戻していいかどうかを確認するためです。十人の証人をそこに呼んで来まして、親戚が通るのを待っていました。そして一番権利のある親類が通りかかった時、ボアズは声をかけてこういう出来事があったのですが、あなたはあのモアブの女性への買い戻しの権利を実施されますかと尋ねました。最初その人は、それが掟だから私は彼女たちが売って行った土地を買い戻しましょうと言いました。でも待ってくださいとボアズは言います。長男の妻がいます。その人も一緒に買い取りをしないといけない。あなたはルツと結婚して、やがて男の子が生まれたら、買い取った土地をこの男の子に譲って、そしてエリメレク家の名を起さなければいけないのですが、できますかと尋ねると、恐らくもう結婚していたのでしょ、先の買い戻しの権利のある親類は、いいえ、私にはできません、私にはそれは無理ですからあなたがしてくださいと言って、そこで買い戻しの権利の移行がされたのです。

もう一度戻りますと、買い戻しということは、神様は選びに基づいて贖いをされるということですからボアズは“ゴーエール”として神様がルツの前に現されたのだということを見ることができます。ルツにとってボアズは贖い主です。そして、神様はずっとご自分の考え方を進めて行かれる。旧約聖書創世記3：15から始まった、神様によって造られた人間が罪を犯したその以前から神様は人を救うために救い主を送られる計画をお持ちでした。旧約聖書はずっとそのことを教えています。旧約聖書はご存じのように救い主を送りますという古い約束です。またルツ記にはこのようにして贖われる人、贖う人という関係が記されています。私たちはこのような関係をここで見て、ボアズという人の存在が旧約聖書の中では本当にイエスという人の像に近い、予型に近い存在であると見ることができます。ボアズを見れば、イエス・キリストはどのような方か、ボアズは何の関係もないのに、ただ親戚であるというだけで、その親戚の長男の嫁を自分の嫁にし、財産、土地を買い戻して男の子が生まれたらそれを与える、そんなことをしたのです。ボアズはルツに親切にしてやり、ナオミのことを思い、そして土地を買い戻し、自分はルツと結婚する決心をしたのです。

そしてこの出来事は4：13に「こうしてボアズはルツをめとり、彼女は彼の妻となった。」と簡単に書いてあります。「主は彼女をみごもらせたので、彼女はひとりの男の子を産んだ。女たちはナオミに言った。『イスラエルで、その名が伝えられるよう、きょう、買い戻す者（ボアズ）をあなたに与えて、あなたの跡を絶やさなかった主が、ほめたたえられますように。』と。そしてその後、生まれた男の子は17節「その名をオベデと呼んだ。オベデはダビデの父エッサイの父である。」とあります。実にダビデがこの子どもの孫、

ですからルツはひおばあさんになります。このようなすばらしい存在になっていく。ここに至って、本当に神様が救い主がお生まれになる家系をこのようにして整えられて、そしてやがてダビデが生まれ、イエス・キリストは子孫です。福音書を見れば、家系図の中に必ず名前が出てくる。モアブ人のルツ、ボアズのお母さん、ラハブもカナン人です。あのヨシヤがエリコを攻めようとして送ったふたりの斥候を、エリコの王がエリコの町で探し回った時に彼らをかかまったラハブです。ですから彼らの血筋の中にはモアブ人、カナン人、イスラエル人だけではなくて異邦人の血筋がちゃんと入っているのです。神様はそのようにして私たちに救い主を送るために、多くの人たちを備えてくださり、またこのような出来事を通して、イエス・キリストがお生まれになる準備をしてくださるということを見ることができ

## B. 新約聖書の主張

### 1. キリストは私たちのために苦しみに遭われた ルカ 22 : 44、ヘブル 2 : 18

「イエスは、苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのように地に落ちた。」（ルカ 22 : 44）

「主は、ご自身が試みを受けて苦しまれたので、試みられている者たちを助けることがおできになります。」（ヘブル 2 : 18）

イエス様の苦しみをここに記してあります。

### 2. 私たちは代価を払って買い取られた 1コリント 6 : 20、1ヨハネ 4 : 9-10

また私たちのために代価を払って買い取ってくださったということです。1コリント 6 : 20 「あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。」とあります。私たちの罪の代価がイエス・キリスト、神様の子どもです。買い取りの権利のある買い取り主はイエス・キリストご自身であり、またその代価もイエス・キリストご自身だということを聖書はここで教えています。キリストがご自分のいのちをもって買い取ってくださるということです。

同じ1ヨハネ 4 : 9-10に 「なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」とあります。「なだめの供え物」、何をなだめるかということ、罪に対するさばき、神様の怒りしかないのです。神様の怒りをおさめるためには動物の血ではだめなのです。人の形をとってくださった神であるイエス・キリスト、ご自分を空しくして来られたイエス・キリスト、その方だけが神様の怒りをおさめることのできる代価だと聖書は教えています。

#### 結論：

マタイ 20 : 28 「多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるため」、人の子は来られたのです。多くの人、私の、そして皆さんの贖いのためにイエス・キリストはご自分のいのちを与えるために来られたのです。神様の怒りをなだめるためにはイエス・キリストが救い主だと信じる以外にほかに道はないのです。ヨハネ 14 : 6 「わたしが道であり、真理であり、いのち」ですとイエス様は言われました。イエス・キリストこそ救い主である、まことの道であるということを新約聖書は教えています。ルツ記によって表されたボアズはイエス・キリストの一つの型です。贖い主としての形を最も表している存在ですが、ぜひ覚えていただいて、救われた私たちひとりひとりにとって神様がなされたことを本当に感謝するとともに、まだイエス・キリストを信じておられない方がおられましたら、私たちの罪を神様が赦してくださるにはイエス・キリストを信じる以外に道はないということ、イエス・キリストが贖いの代価として、神様が私たちのために払ってくださったことを覚えて是非お帰りいただきたいと思えます。